

まえがき

2003 年より高等学校の普通教科に情報教育が必修となる。そうなると 3 年後の 2006 年には、コンピュータやインターネットを操作できる学生が大学に入学してくる。授業も様変わりする。インターネットでシラバスをみて、教材をサーバーから取り出し、予習や復習をするようになる。解らないところは、教員や仲間にネットワークで聞く。

現在、大学で行っているコンピュータの操作やソフトウェアの使い方などの基礎教育は、大半が高校までの教育課程で実施されることから、大学での教育は、リテラシー能力の補完を除き不要になろう。しかし、免れる反面、大学では、高校教育を踏まえた上での高度な授業が求められてくる。大学審議会でも指摘のように、21 世紀に求められる教育は、「課題探求能力育成」の授業が中心になる。情報教育も同様、問題発見・解析のための一つの手段の教育だからである。それ故に、大学教育での次の課題は、人間がより主体的に行動するための総合的な能力として、問題発見・解析能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力が求められてくる。

本報告は、このような立場から 2006 年の将来を見据えて考察したものである。モデルとして掲げた授業の内、問題発見・解析能力の授業は、現時点で取り上げるには些か高度であり、担当する教員が少ないと敬遠されがちに思われるところもあるが、高校での教育が定着すればその見方は変わるであろうと考え、敢えてこれからの方向性として提言することにした。

とりまとめに際して分科会では、1997 年にとりまとめた「情報教育モデルシラバス」を見直し、とりあげるべき内容を問題発見・解析にコンピュータやネットワークを活用する教育に重点をおいた。高校での教育が行われることを前提としたため、いわゆる操作教育を中心とする能力については「前提能力」として掲載し、現在の基礎教育にも役立て得るように紹介することにした。モデル授業の紹介は、目標、授業内容を基本枠組みとして掲げ、授業に必要なモデルシラバスと教材としての演習問題、基礎資料のサンプルを掲載した。

本書のとりまとめに際しては、主査の芦葉浪久氏（十文字学園女子大学教授）、山本 恒氏（園田学園女子大学教授）、阪井和男氏（明治大学教授）の委員はじめ、アドバイザーとして貴重な提言をいただいた神沼靖子氏（前橋工科大学教授）、真鍋龍太郎氏（文教大学教授）の方々の真摯なご尽力に感謝する次第である。

情報教育研究委員会第一分科会

担当理事 蔵 下 勝 行